



アラン

ーノルマンディー  
人のプロポII

【2013年5月号】

翻訳：高村昌憲

市内電車では良く勉強させられるものです。商売の上げ潮と引き潮を隣の人に教えている小さなレストランの主人の話は私は聞きました。彼は言いました、「町内に大きな家が建って、沢山の石工や人夫たちが私の店と料理を気に入ってくれたが、それからというものサラリーマンがなくなって仕舞ったんだ。サラリーマンは労働者を無視しているという訳ではないのだが、彼らは黒い服を着ていて、時々少し擦り切れていることがあっても何時も良くブラシをかけている。それに反して労働者は職畝のついたビロードの服を着ていて、モルタルや漆喰のしみが付いた儘やって来ていた」。

人が望むならその先を考えることは出来ます。色々な仕事が既に、様々な種類の仕事を人間は産み出しています。何もしていないで白くてきれいで手触りが柔らかい手が、ハンマーや鶴嘴でざらざらとして褐色で豆も出来て形が変わった手を握ることは、お互いが或る種の感動を覚えなければ起きないことです。しかし、服装は多分それ以上に重要で、態度や容姿を規定します。襟がカラーの人は、頭も上品にめかしています。きれいに輝いている靴を大切に履いている人は、慎重な歩き振りで歩き、間違いなく裕福な人です。サラリーマンでも最も貧しい人は、まさに最も服装の奴隷になっている人で、他人の意見というものを最も気にする人です。このことは或る種の礼儀正しさと羞恥心を生みます。サラリーマンが酒に酔うこともたまに見かけますが、酩酊はサラリーマンも大変に変えて仕舞い、響鬘を買い、テーブルクロスを汚すことになります。

さて、機関車を降りて自分の家へ帰るのに市内電車に乗る機関士を見てご覧なさい。彼は小役人よりも沢山の金を稼ぎ、頭も良くて勇敢で誇り高い性格ですが、石炭で真っ黒です。焼けた顔には汗が赤くなった筋を引き、炎と太陽が更に顔を焼きます。彼は一晩中機関車を動かして、疲れて自分の部屋の一隅へ眠りに行き、傍らには可愛らしい奥さんが不満顔で横にいる夫に言います、「この人は酔っ払いよ！ 何て醜いのでしょうか！」しかしながら、彼は疲れ切っていて眠るだけです。取分け、彼女が言っている意見のことなど何も考えません。そういう訳であらゆる場合において、自由気儘な歩き方やだぶだぶした服の襞を一寸見て言われます。あそこにいるのは労働者です。

有名な階級闘争とは恐らく、漆喰のしみの付いた作業衣と、良くブラシがかけられたフロックコートとの不平等な戦いでしかありません。

(一九〇七年八月二八日)

売る技術と言うものがありますが、売るためには沢山のやり方があります。お店の中では色々話し合い討議され、あれこれ迷いながらも常に熱意ある動きに目覚めていることから成り立っています。

感情や感動又は単純ではっきりとした心の動きは、当惑し迷っている客の心を揺さぶり、果実が熟するように、買おうと決断するようになります。

警官が退去を求めて追い駆け回し、花々や果実で一杯になった小さな台車をあなたは知っています。それらの台車は何時も立ち去ることを余儀なくされますが、何もそんなに都合が悪い訳ではありません。人は欲しいと思っていた物が無くなって仕舞うと、どれにしようか考える必要もありません。無くなって仕舞う物の後を追跡する本能的な心の動きが出てきますが、これが欲望から意志へ移行する瞬間です。それは人が追求するものであり、人が望み、追い求めているものであるからですが、心のメカニズムはこのようにして構築されていきます。

私は、或る新聞売りを知っています。彼は、他の新聞売りよりも後からやって来ましたが、他の連中よりも沢山売っていました。如何してでしょうか。それは極めて簡単です。彼は何時も走っていたのです。まるで客が彼を呼び止めたかのように、右へ左へ走っていました。客は彼を見るのも大変ですし、彼の叫び声を聞くのも大変です。人間が大きな声で叫ぶ時は、決まり文句であったり、慇懃な言葉であったりしますが、それが日常的なものを作っています。この熱中した走る動作は、その後を追ったり、止めたりしたくなる気を人々に起こさせました。かくして人々は、新聞を買いたいと思う前に、手には新聞を持っていました。

私は、クーポン（回数券）を売る一人の男を市場で見ました。彼は大きな赤いパラソルを立て、赤い帽子を被っていました。とても計算された姿です。赤は情熱に目覚める色であることが分かります。彼のやり方は叫びながらクーポンを数えることでした。一！二！三！四！ 次には誰の顔も見ないで全部丸めて客に投げつけ、もう一人が客から金を受け取っていました。これらの乱暴な動作は、人々に注意力の喚起を促しました。上品なご婦人であっても、クーポンの束を受け取るには同じ様にしなければなりません。既に彼のやり方は、当然のこととして人々に受け入れられていました。

私は、もっと良いものを眼にしました。半端ものですが十分に使える磁器の山を売っていた男です。彼は各々の磁器の山に値をつけていきました。誰も買わないと、彼はある限度まで値を下げました。そして一枚、二枚、三枚と平然と磁器を割りました。周りの人々は囂々たる非難の声を上げますが、結果は変わりありませんでした。しかし、彼のやり方は最早、才能というものではなくて、天才と言うべきです。

(一九〇七年九月四日)

精神病医師の報告とその責任について、若き医者は興奮して言いました。「少しは教育を受けた人ならこの世に自由意志があると信じる事が出来たように、もしも殺人を犯した犯人が自由意志を持っていたとするなら、と検査後に私たちは尋ねられます。このことは、大部分の人間には、判事ですらもメリットとデメリットという絶対的な観念に支配されていて、それが公平な罰というものであることを証明しています」。

哲学者は彼に答えて言いました、「公平な罰とか不公平な罰というものは決して無い、と私は信じていますが、少なくとも役に立つ罰とか役に立たない罰というものはあると思います。しかし、過去の人々が現代の私たちよりももっと無知であったと私は信じていません。何時の時代にも罰は公的なものとして受けるものでしたし、そのことは或る者には脅えさせ、他の者には安心させるものを持っていたと私には考えられます。

——医者は言います、「しかしながら、どうして王の殺害者を罰するのかを理解して下さい。そこにあなたは罰と罪の間に或る種の相対性をもった神学上の思想を見出しませんか？」。

——哲学者は言います、「全然見出せません。役に立つものとして考えられているのが罰であると私は理解しています。当時は、王が誰よりも酷く恐れられており、それは尊敬されることにとって役に立つと考えられています。そして、それはふしだらなことではありませんでした。何故なら王の殺人は大変な無秩序を齎し、非常に沢山の人が苦勞するからです。嘗ての残酷な拷問に関して言うなら、正当な憤激を鎮めるのを目的にしていると見てはなりません。それは表面上の見せかけです。個人個人の怒りと言える民衆の怒りは、恐怖の一つの姿でしかありません。そして更に今日では、白人女性を強姦した黒人生きた儘焼き殺す人々であり、彼らはこの方法によって憎むべき罪の復讐を遂げ、法の正義を回復させたいのをあなたは信じています。多分、彼ら民衆自身もそのことを信じています、何故なら大部分の人々は自分の情熱を非常に間違っ理解しているからです。実際に彼らは黒人を脅えさせて秩序を回復させることしか望んでいない、とこの私は信じています」。

「と言っても古くからある同罪刑法のことを如何にあなたに説明したら良いのでしょうか。

——その法は少し私をびっくりさせることを私は敢えて言います。そして、くたばらせるというこの観念は正確に言うなら、何者かによって権利の目を潰された者のための権利の目というもの、子供じみていると見做すことが出来ます。しかしながら常に不条理ではありません。他人に容認させた苦痛を人に何らか体験させるのは、役に立つことがあります。小さな子供というのは自分の弟の腕をつねって遊びます。もしも私がその子供を同じ様に腕の同じ場所をつねっても、それはそんなにも馬鹿なことではありません」。

(一九〇七年九月五日)

「筆相学や手相占いや馬鹿げた迷信というものがあります。筆跡とか手相を見て、人間の性格が分かるとは思えません」と宗教を信じない自由思想家は言いました。

分別をもって考えてみましょう。筆相学は恐らく大変に難しい或る種の科学ですが、その基本は大変に良く理解されています。もしもあなたが疲れていたなら、あなたの筆跡はその影響を受けるでしょう。怒った人は、恰も半睡状態でサインするようにはサインしません。書くということは、あなたが制限とか用心深さについて考えて、あなたの手はそれに対応している動作を表し、そこから線の停止とか終了を自分の筆跡の中で解釈出来るようになるのでしょうか。

その様な方法で人は筆跡を読み取ることが出来るのでしょうか。他にも問題があります、実際に明らかにするのは大変に難しい問題です。何故なら経験から確認するためには、二つの事柄があるからです。筆相鑑定家の判断と書いた人の精神状態です。ところが精神状態を確認するのは殆ど不可能です。自分の性格を示す特徴を隠したがるかもしれませんし、殆ど何時も自分の性格が何であるかが分かりません。彼は自分自身のことを全く素直に考えますが、それは他人が彼に話している内容です。それ故に経験というものは何も解決するものでなくなります。しかし、少なくとも筆相学は基本的には理解出来るものです。人間の性格とその動作の間に関係があるのは確かです。

しかし、手相を見る手の線は、それが何かを意味していると如何に理解するのでしょうか。手の線は何を表しているのでしょうか。手を開いたり閉じて握ったりする方法とは何を示しているのでしょうか。そうです、手の動きには非常に沢山のニュアンスがあります。馬車を動かす御者にお金を支払う人を見て下さい。お金の持ち方で誠意を見せようとする爪を下にしますし、横柄ですと爪を上にして指の先で支払い、頭や背中や肩の動作全てが同じ様に表しています。しかし、そのことは如何に筆跡と結びつけることが出来るのでしょうか。如何に一方では深く刻み込み、他方では消えて無くなるのでしょうか。手は動作よりも他のことも良く表します。手は、犁やハンマーや鞭や拳銃を持って行為を生みます。これらの行為は、体の動作よりも手によって行われた方が変形され易いに違いありません。ところで仕事というものは、人が細部まで正確に行っても殆ど人間の性格と関係がありません。フェンシングをやる人の野心というものは、作家の野心と、手相という同じ徴によって如何に示すことが出来るのでしょうか。

それ故に私には手相が分かりませんし、私としては精神を強くせよと言うしかありません。というのは私の眼の前で起こり得るのは予想外の経験であるからです。私が筆跡から性格が読み取れるという仮説を立てた時、その仮説に関して何も理解していなくても、私は何でもかんでもどんどん結論を下して行けると思うのでしょうか。そんなことは出来ません。

(一九〇七年九月九日)

若い理工科学校の学生が、誰もが金持ちになりたいように、ルーレットで賭けていましたが、少なくとも彼はチャンスについて推論しようとして、次の様な一寸した話をしてくれました。「私が知る限りにおいて、同じ色が続けて七回来るのは非常に稀です。ですから私は、次の法則があると行って良いと思います。一つの色は続けて六回来るとして何回も続けて私は賭けます」。一つの法則で実施し、合理的なことから馬鹿げたことまでこの法則を与えていくことは幸福そのものであり、彼は六回赤に賭けると次は黒に賭け、六回黒に賭けると赤に賭けるようになり、皆と同様に或る時は得をし、或る時は損をしました。

にこにこしながらその学生の後に続いて賭けていた仲の良い老人が、ついに彼に言いました、「何故あなたは推理するのですか。情熱なしで誰も生きることが出来ませんが、間違った推論で自分の情熱を身に付けることは最悪に阿呆らしいことで、私は何時もそのことを避けられると信じています。あなたは七回続けて赤にしないで、六回続けて赤に賭けてから黒に賭けて、自分では大変に賢いと思っています。しかしながら、もしもあなたが正しく推論したいなら、二回同じことをやれば次も同じ様にあり得ることであり、そのことはあなたも良く知っている筈です」。

理工科学校の学生はルーレットを止めて、公園の中で老人の後について行きました。太陽は海に沈んで、二人だけが一寸その光を凝視し、続いてあちらこちらを見てみると、二人が見たのは太陽の形をした薄紫色の斑点でした。更に話をした時に、老人は賭けとチャンスの確率についての話に戻しました。老人は次の様に言いました、「賭けをして遊ぶ人は、全てが自分で想像することは一つの色を選択して、先程あなたがやったように間違った推理を推し進めて行きます。あなたの好みの儘に、どうしてその様な色を思い出したくなるのでしょうか。想像力が重要になると、私たちの眼というものは自分を追って行きます。あなたは太陽を凝視しません。あなたは薄紫色の斑点を次に想像することを止めることが出来ません。賭けについても同じです。あなたが赤ばかりを余りに考える時、どうしても他の色のことについても考えて疲労して来ます。習慣は一連の賭けをその儘続けて行くことを私たちに齎しますが、疲労はその賭けを交代させようとします。かくしてあなたの賭けが続いて行くのは、すり減らすことと栄養となることの連続です。あなたが言うように、一つの色に立ち止まるのは、その色が当たって稼がせてくれると思うからで、実際にあなたがその様に信じているのは、想像力がそこに止まっているからです。人間は、そのルーレットを賭けるルーレットなのです」。

(一九〇七年九月十五日)

私たちは急流に沿った狭い道を進んでいました。両側には城壁のような岩が立っていて、三百メートルはありました。或る時は丸襷を付けた飾り襟のような皺を付け、或る時は巨大な割れ目で途切れており、或る時は再びそれが現れて殆ど垂直になっている地層が見えましたが、その下方では急流が唸るように流れ、丸くなった小石の上方には家のように大きな石が幾つもありました。地理学者は私に言いました、「どのような地殻変動でもその中に書き込まれているのです。或る日どうしようもない程の大きな力が、急流の側面に立つ絶壁となってこれ程の地層を持ち上げたことは明白に分かります。この時、急流の水位は上がり、私たちの背後に大きな湖を形づくり、嘗て私たちの頭よりも高い処を流れていた急流が今は足元にあり、そして少しずつ掘り下げて行って三百メートルの峡谷になりました。あるいは岩の間に滑り込んで行って、多分、水はトンネルを掘り、その天井は最後には崩れました。水は山に勝つようになります」。

私は彼に答えます、「あなたは映写機を余りに早く回しすぎます。嘗ての水はゆっくり仕事をしていたとあなたは言いますが、今でも水は働いています。しかし、水よりも大地が早く仕事をしていたかの如く言いたいのは何故ですか。明らかに私は峡谷の歴史について確かなことは何も言えません。私たちの前には、多分書かれたものより真正なものではあるが、それを解釈するには更に容易でない記録というものがあります。しかしながら恐らく私は、それらの変化が今も進行しているように、常に行われていたと信じるようになります。これらの巨大な岩石というものは今でも私たちの前に立ち塞がっています。変化には幾つかのものがありますが、取分け海岸の変化は見れば良く分かり、その変化を仮定することが可能です。その運動は力強いがゆっくりしています。更にもっと早くなったとは思えません。大地は昔のように冷たくなり、表面の地層は昔のように収縮し、従って昔のように罅が入り、そして膨れ上がります。私の映写機はこのように正しい早さに調整され、どのようにして急流が流れて行く道が掘られたのか大変に良く分かります。今も急流が自分の道を掘っているように、昔も掘っていました。しかしながらそれは本当にゆっくりと掘っていましたし、地層が現れるのも本当にゆっくりで、翼を持ったオオトカゲがこの変化を見ていましたが、今よりも地球の大異変が起こることはなく、あるいは小さな地崩れもめったになく、雪解けの季節に見られるだけです」。

従って人間の歴史の本の中で、それは読まなければならないでしょう。というのもあちらこちらで幾つもの地崩れはあるからで、戦い、暴動、そしてバスチーユの奪取のようなものがありますが、事の本質は進展においてゆっくりと連続して切れ目の無い作用によって行われ、事に当たった人々でさえも気付かないものです。例えば政教分離法は地崩れの一つでしたが、思想の変容、道徳観念と信仰の変化は地崩れの前にあり、次から次に続いて起きることです。そして、人間を生んだ亀裂こそが分からないものであり、それは駅にいる旅行者のように地崩れによってしか自分に目覚めないのです。

（一九〇七年九月二〇日）

ノアの大洪水は、人々の記憶の中に刻まれています。何故なら、それは誰もが知っている地球の大異変であるからです。水の恐ろしさが、至る所で眼に浮かびます。セーヌ川は、穏やかな流れの河ですが、洪水になって道を遮断することを誰が考えたのでしょうか。水は土手よりも高く上がることを、私たちは知っています。道端の水の流れから、ノアの大洪水へ結びつけて考えるためには、猛烈な雷雨を考えてみれば十分です。通りに勾配があるのと同じ形状として屋根にも勾配がありますが、それらが証明していることは、私たちは絶えず水の力と闘っていることです。

水門は、眼で見て一番美しい風景の一つです。人は巨大な門に驚嘆します。水の圧力はそれでも門から噴き出る水によって分かります。そして、最も美しいものは、きらきらと輝く小石で一杯の船です。船員がいて、花で飾った小さな家に子供たちが溢れているような船が、水圧によって持ち上げられているのを見ることです。そうです、そのことで良く分かることは、人間は水という怪物を手懐けたことであり、その怪物は人間よりも非常に強い力を持っているということです。

私が子供だった頃、水車小屋の排水口から流れ出る小川を、舟が浮かんで走っていました。水はこんこんと音を立てて湧き出て、のどかに流れていましたが、数時間後には遠くから聞こえてくる貯水池の轟音が、柳を通して大きくなって私のところに聞こえてきました。それと同時に水位は上がり、水は黒ずんできて、間もなく私の足元でごうごうと音を立てていました。それは私が、或る種の宗教的恐怖を感じた最初のことです。それというのも粉ひき屋が水門の扉を操作しているのを、私は見たことがなかったのです。

その後、私が海を見たとき、ラングルーヌやクールスールの平坦な海岸でしたが、私は遠くに水平線と泡で出来た羊たちが動くのを見た時も同じ驚異を覚えました。何故なら、私は同じ水の力を認めただからです。このとき私は、粉ひき屋もいなければ、水門の扉も無かったことを知っていましたが、定刻になると満ちてくる潮の波を誰も防ぎ得ませんでした。

それから私は、奔流や氷河を見ました。そして私は、ある事が他の事を理解させているのだと思いました。大きな氷の塊を百の教会と見做すのは、大地を引き裂いて前へ押し進め、蓄積された岩で百の町を造るのに十分であるからです。私はあらゆる物事の変化とは、その〈必要性〉と  
言われているものからくることを実際に理解出来るまでになりました。重要なのは毎日の訓練です。書物を読むことも同じことで、沢山の訓練が必要です。勿論、教会の中にいる〈神〉に会いに行くのも殆ど同じことです。(一九〇七年十月三日)



紫色のリボンの教育功労章を持っていないから、酷く悔しがっている人々がいることは確かであると言われています。他の人々はインクのしみが付いたり、皿が割れたりして怒っています。あなたは、ペンを動かしたり祈禱所で声を震わせて生活する別の人々を見るでしょうが、彼らは自分たちが行っている卑劣な仕事を嘆いています。女性たちは仕立てが良くないブラウスにもそれなりに夢中になります。詩人たちもいますが、彼らは湖で涙を流しています。

私は土曜日に、帰宅した女性の工場労働者たちと一緒に旅行をしました。その中の一人が言いました、「まだ一週間が終わっていないわ」。別の女性が言いました、「嬉しいことに明日は日曜日よ。掃除が出来るわ」。そして、三人目の女性が言いました、「しかし寝る前に毎晩自分のために少しでも多く働きたいわ。でもどうすれば良いのでしょうか。昨日は少し縫い物をしたと思ったけれど、眠って仕舞ったわ」。彼女らは黄昏時の生き方について考えて下さい。明るい日中には決して楽しみがありません。赤い太陽が時々は出て来る時もあります。アルコールと恋愛です。

更に、憂鬱症の男性も私に言いました、「その楽しみが私の慰めるになるのを何故望むのですか。私の苦しみよりももっと辛い苦しみというものがあります。ねえ、それはもっと私を悲しくさせるものです。人間の精神状態は、既に幸福の中にいる私のようなもので、私は自分の喜びを悲しげに引きずっているのです」。

憂鬱症の人よ、あなたは立ち止まって下さい。あなたが多くの弦楽器から豎琴まで所有しているのを私は知っています。それ故に私があなたに言いたいことは、寧ろそれらの楽器を今とは違う弾き方をすることです。今のあなたが持っている幸福は些細なものですし、何も良いものは生みません。炉端での余暇、気持ちの良いベッド、ピアノ、あなたの書棚、コーヒー、そして上手に狐色に焼かれたトーストパン、これら全てが休息や太陽の光を見ない労働の日々と関係しているのであり、私が先程話したのはそのことです。彼ら労働者が単に今よりもほんの少し働かなければ、あなたは今よりもっと沢山働かなければならなくなるでしょう。飲む薬も無い重病の人々のことを考える前に、あなたが何もしないで引き起こしている重病の人々のことを考えて見ることです。そのことは血潮を騒がせます。そのことは何もしないで月光に照らされて湖畔で涙を流すことよりも、もっと健康的です。

(一九〇七年十月十二日)

雨です。ディアボロで遊びましょう。優雅に空中を飛ぶこの独楽に、私は或る考えを示したいと思います。独楽は私に重要な真実を思い出させました。それは文明人が最早、自分の手を自分で使用する術を心得ていないということです。

文明人たちは何か難しい訓練をやるように言われて、それをやってみると足元から頭の先まで体全体を強ばらせることしか出来ず、歯を食いしばり、滑稽な格好になって仕舞います。ディアボロを回すことだけでなく、自転車、水泳、フェンシング、ヴァイオリン、ピアノ、テニスをする時は何時も同じで、最初は自分の筋肉を全て同時に緊張させて仕舞います。

その緊張は何処から来るのでしょうか。少しでも不安なことがあれば怒り出し、ハリネズミのように怒りっぽい筋肉のパニックは、何処から来るのでしょうか。それは多分、無為な人生とか単調な労働だけの生活が齎すものです。しかし、自然に起因するものでもあります。人体は、半ば鎖に繋がれた様に関係し合った動物たちで一杯の袋に譬えられます。もしもあなたがその中の一匹をつねったならば、つねられた動物は動き出し、他の動物は目を覚まし、沢山の物音や怒った声を伴って袋はびくびくと動き出します。

この様にして情熱に火が付いて、非難すべき行為が生まれます。或る難しい遊びを下手に挑戦している一人の人間を観察してご覧なさい。彼は既に怒っており、只単に震えて地団駄踏んでいるだけでなく、彼の言うことも穏やかな儘でいられません。彼は誰かに又は物に、あるいは自分自身に罵詈雑言を言わねばなりません。声を張り上げて演説する人が、直ぐに腹を立てて怒るのも同じメカニズムによるものです。彼は怒っているから叫んでいるのだ、とあなたは言うのでしょうか。しかし、そうではありません。何時も殆どの場合、彼は大声で叫ぶから怒っているようになるのです。一番小さな部屋にいるなら、大声が要求されることはまずありません。彼は最も穏健な意見を言うようになるでしょう。

かくして私たちの情熱は駆け出します。肉体的な興奮が自らの手で増幅され、肉体はいわばそれ自身で鞭を打って刺激しており、私たちの意見というものは自分の情熱に従います。何時もその様に行われたいとするなら、少し足りないものがあるからです。

時々、私は自分が嫌いなために自分を打ちますが、大抵の場合は自分を打つから自分が嫌いなのです。闘いは直ぐに人間をお互い敵にして仕舞います。この様にして戦争がなくなることはありません。

(一九〇七年十月十四日)

## 七十 (アナキスト)

---

私たちがアナキスト（無政府主義者）、社会主義者及び同じジャンルの人としての或る種の政治家たちについて話していた時、一人の賢者が私に言いました、「真実のアナキストとはあなたです、アラン」。

私は彼に答えました、「あなたがその様に言うことに大変驚いています。私は単に税金を払うばかりでなく、税金を払うことが喜びなのです。何故なら、それは私が人々と共通のものを所有していることを思い出させてくれますし、道路や橋や灯台や堤防や学校や図書館や病院のように、それは非常に沢山の有益なものでもあるからです。更にその上、私は厳格に法律を守り、警官たちが行う業務に支払われる給料は不十分であると考えています。要するに私が感心するのは、他でもなく人間の行為における規律です。良き秩序を保持した制度は、見るのも嬉しくなる一つの出し物です」。

賢者は私に言いました、「そうです。私はそのことを全て分かっています。というのも私は昔からあなたを知っているからです。それでもあなたは、やはりアナキストです。あなたは秩序とヒエラルキーの必要性を見分けますが、およそ雨が降っている時にあなたは自分の雨傘を忘れる様なもので、役に立ちません。そして、あなたは自分自身のためにさす雨傘が好きではないのです。あなたは同じ調子で知事と話しますし、御者とも話します。それは驚くべきことです。あなたが御者には丁寧すぎて知事には丁寧でないのかどうか、私は言うべきことを知りませんが、そうは言っても結局のところ御者と知事とでは何らかの相違があつてしかるべきでしょう。あなたは服従することを知っていますが、敬意を払うことがありません。あなたは学位とか階級というものを信じていません。もしも著名な教授が話をして、アカデミー・フランセーズ会員の榮譽の象徴である緑色の棕櫚を身に纏っていても、あなたは小学生の話を聞くように教授の話を聞き、常に間違いを探してそれを発見して喜んでいるのです。そして、一言で肝心なことを言うとなれば、あなたに宗教はありますが、信仰がありません。軍帽などに付いている羽飾りと共にあなたは社会を認めますが、それは必要悪として認めるのであつて、誠実な公務員が目に涙を溜めるのは勲章を授かったからですが、あなたはそれを滑稽なことと見ています。実際にそう思うのですが、あなたはアナキストです」。

私は白状しなければなりません。何故なら恐らく彼が言っていたことは、絶対に真実ではないからです。結局のところ彼が信じている以上に、私は大変な偶像崇拜者なのです。勿論、私はそのことを後悔しています。

(一九〇七年十月十五日)

## 七十一 蓄音機 (LES PHONOGRAPHERS)

若者たちは、殆ど何時も実に礼儀正しい学者と同じです。彼らは、失礼なことや言うてはならないことがあることを教育されます。若者たちは殆ど半熟卵の食べ方を覚えるようにして、問題を解決することを覚えます。ナイフで切った洋梨をナイフで刺したりしないでし、重さ一キロの羽毛は一キロの鉛よりも重くないとは言わないでし、二つの固体の表面間の摩擦は速度に依存するとは言わないでし。しかし、それらのことに代って、そこには美しい言葉の約束事があります。それと同時に、若者たちは不注意から馬鹿なことを口に出してしまうと、非常に重々しい手で半熟卵を押しつぶしたように顔を赤くする彼らを、あなたは見るでし。

蓄音機には、何よりも素直な性格があり、より良いものを引き留めて置く記憶もあり、同時に軋んだ音や鼻にかかったような音があり、反対に驚くほど人間の声に似ているときもあります。良い蓄音機とは、自然に従順さを身に付け、心に思っていることしか言わない青年期の後、直ぐに形づくられて一度も針を通したことのないレコード盤を沢山持っているコレクションに恵まれた若者と同じであると言いたいのです。そのような若者は、最も高い身分の生涯が約束されています。彼は、常に人が望んでいる歌を歌い、そして申し分なく歌い、良く出来た一冊の解答集を生きているのです。あらゆるコンサートに際しても、現代の蓄音機は最高の褒美に与ります。そして、単に小さな東屋の前で間違っ歌わなただけで理工科学校（1）への入学が許可されるのでし、そこは国によって検印された調整済みの蓄音機の店なのです。

しかしながら、世の中には扱いにくい蓄音機が幾つもあります。音が悪く、それ自身が何かを歌っているような蓄音機の音、軋む音、ひゅうひゅうという音、何を言っているのか分からない我慢出来ない音が何時も聞こえてきます。良く聞こうとすると、耳をひどく痛めます。もしも蓄音機の四角形が二つになれば、音が出る表面も二倍になるだろうと或る者はあなたに言います。振り子時計は何故、自分の動きでネジを巻かないのだろうと質問します。別の者は、何も費用をかけないで電気を手に入れるために、機関車の車軸の上に発電機を乗せたいと考えます。ぼんやりとして、はっきりとしない思考は人が理解することが出来ず、増して表現することは出来ません。産み出すことは辛い仕事です。

しかし、発明や進歩もその根は同じです。火のないところに煙は立ちません。私は、馬鹿なことを言わない若者は嫌いです。 (一九〇七年十月二二日)

(1) グランド・ゼコールの一つで、理工系の大学として入学が非常に難しく、卒業後は軍人やエリートとしての道を歩みます。アランも入学を希望しましたが、比較的入学しやすい高等師範学校へ変更しました。

## 七十二 歌の叫び (CRIS CHANTÉS)

ある朝、あなたは、通りで物売りが大声で歌う叫び声を聞きますが、それはあなたに時刻を告げます。「小鳥ちゃんの餌のはこべだよ」、あるいは「鯿の一夜干しだよ」とか「鱈のフライだよ」とか、「シーツは要らんかね、シーツだよ、シーツの洗濯だよ」と、歌うように叫びます。あなたのところまで聞こえて来るそれらの声を良く観察すると、あなたは言葉を聞いているのではなくて、ただ単に、或る歌のようなものを聞いていることに気が付きます。

軍隊の号令についても、同じことが言えます。これら二つのことは、そこに重要なことを含んでいます。人間の声は高くなったり低くなったりしますし、リズムも産まれます。計算された沈黙は、軍隊で将校が言う時のように、上手な号令の要素である場合と同じです。「狙え……撃て！」そこには音楽の一つの始まりがあります。それは人間的感動もなければ、曖昧さもなく、人間の集団としての行動を指揮する術を心得るもので、必然的に正確な歌い手となって拍子をとって歌います。

距離を隔ててやり取りする言葉は、自然に音楽的に成ります。通常言葉のアクセントにメロディーが取り入れられ、そしてきれいな言葉になって、より良く理解されるために単純化されていくのだと思います。しかしながら、人間がこの様にしてメロディーを産み出したと仮定することは、やはり余りに直感的すぎます。狩猟の時、必然的に猟師たちは遠くから知らせ合います。恐らく、彼らは口に手を丸くしてから、大声で叫ぶことから始めました、つづいて樹皮や金属のメガホンを使いましたが、彼らはそれを使って普通の声ではなく、リズムをつけて高く鋭い声や低くて重い声しか使わずに、唸ただろうと思います。その時、肉体は声に合わせて調整され、フィルターのような役目を果たしました。何故なら体が単なる管では、やはり音を力強く出せませんし、和声的と言われているものしか出せないからです。そして、それはもっと他のことに応用され、物売り人の素晴らしい声になり、彼らの声は叫ぶ技法の代表となって彼らの音を発達させました。かくしてメガホンは少しづつトランペットや狩猟ホルンやラッパになっていきましたが、それと同時に叫ぶ技法が歌の技法になりました。私たちの音楽というものは、ラッパや狩猟ホルンが奏でる音符によって構築されています。制度として確立したものの起源を探求しなければならないとき、それは私たちを取り囲むものの中、つまり自然の中から見付かります。古い昔の紙に書かれているものではありません。

もしも頑なに心理学に執着するのでしたら、インスピレーションは私たち一人ひとりの独自の行動による反響であると言えるでしょう。歌を歌う者は、一人ひとりが独自の力と偉大なる歩みを発見します。その上、もしもそのことを意識せずに聞くことが出来るようになると、普通に話をして声が高くなって上がり、低くなり、突き進み、そして終わる一種のメロディーを形づくり、美しく話すことが出来るようになるでしょう。

(一九〇七年十月二六日)

「夢よ！ 私は夢を心配するようになるのだろうか」(1)。この様にアタリーは語り、そして私たちは全て彼女のようになります。夢は霧や煙でしかありません。しかしながら私たちは夢の儘に正確に生きますが、その意味どおり完全に生きるのは難しく、実際の生活に先行して生きるようなものです。例えば、もしも或る友人が私たちの眠りの中に何度も現れ、彼の顔付きや態度が嫌悪とか偽善とか他に何か敵愾心の様子を表していたなら、私たちの友情に支障が生じるかどうか私には分かりません。その意味において、如何なる夢でも現実の前兆になっても良いが、前兆になると少なくとも私たち自身の裡で変化が生じることとなります。

もしも夢を見て余り心を乱したくないなら、その原因を突き止めなければならないでしょうし、その原因は屢々本当に単純で自然なものです。或る朝、私は火の手を上げる紛糾した戦闘に参加した夢を見たことを思い出します。全てのものが燃え、傷口からは赤い血まで出ていました。最後に私は眼が覚めます。隣接した射撃演習場から聞こえて来るのは何発もの銃撃の音です。そして、私の眼の前には窓を閉め切った半透明の赤いカーテンが引かれ、その上には大空に弾丸が飛んでいるのが見えます。これらの色と弾丸の音は私の眼と耳によって私の裡に入って来ました。そのことによって私は、中間色の羊毛でタペストリーが作られるように、夢を織って行ったのでした。他で見た夢は何かそれに反対するもので、それらの夢を押し殺します。自分たちの頭の上まで掛け布団を引っ張り上げるといふ全く単純なことです。もしも思い出が蘇るメカニズムをこれらの原因と結びつけるなら、夢を自然で平凡な出来事として片付けるようになり、今まで以上に気が休まって具合が良くなります。

しかし、人間たちがこの様にして幽霊を追い払い、神々を追うことを学ぶためには多分何世紀も必要としなければなりません。幽霊や神々は死者たちと会話をしていると長い間信じられていましたし、人間たちの敵は今でも脅しにやって来て、彼らの頭は槍の先で乾燥させられ、あるいは彼らの灰は風に放り出されて、長い時間が同じ様に経ちました。そこから人間たちは魂や死者の国と呼んでいる不死の肉体という思想を引き出し、その王は神のように崇拜されるでしょう。そして死後の世界での有利な地位を考えて、死者たちに気に入られる人生を人は送っていました。最初の無神論者とは多分、決して夢見ることのなかった人間だっただろうと思います。

(一九〇七年十一月一日)

(1) ラシーヌの悲劇「アタリー」のテキストとして第Ⅱ幕第Ⅴ場に次の様な詩句がある。「〈夢想〉(私は夢想を心配するようになるのだろうか!)」。

民衆大学に見るように、民衆討論は時として少しばかり疲れ果てて仕舞うことがあるのは事実ですし、そのことは大声が飛び交う時に友愛の感情が目覚め、一時間の講演の後には和解の解決方法が導き出されることになります。というのも利益を共有することが最早問題でなくなると、討論は何時も雲の中にいるようにぼんやりとしたものになり、そして抽象された観念は間もなく退屈な平和に支配されてくるからです。

一つの事実の周りに多くの学者を結びつけなさい、会話は直ぐに熱を帯びてきます。例えば、何故海は塩分を含んでいるのかを尋ねてご覧なさい。あるいは何故独楽は回っている限りバランスがとれて倒れないのか尋ねて下さい。あるいは蠅の問題のように、私が先日お話しした分かり切った問題を良く考えてみて下さい。その時、あなたは情熱を鎮めるためにやるべきことが沢山あります。

しかし、もし彼ら学者たちが抽象的観念までに自ら達したならば、もし彼らが漠然とした一般的仮説に関して議論したり、科学の未来とか実験的方法に関して議論したなら、その時は様々な言葉で全く同じことを言っていると直ぐに認めるでしょうし、或る賢者はそのことに気付いて指摘するでしょうし、人間たちは言葉についてしか議論しないと結論を下すでしょう。何事も全て挨拶のやりとりによって終わります。これは夜を過ごすためには良い娯楽になりますし、良く眠るためには素晴らしい準備になります。

政治とか道徳とか宗教が問題になっても、更にまだやっています。というのもアキレスのように不死身で傷付かない言葉があるからです。「私たちは皆同じ信仰を持っています。〈理想〉という信仰です」。その通りです。少なくとも一人ひとりが自分の理想を持っています。「私たちは誰もが〈真実〉と〈正義〉を愛しています」。そうです。それらは純粋な大理石の立像としてそこにありますが、人々の注意を引くことはありません。「宗教しかありません。それは〈真〉〈善〉〈美〉という宗教です」。しかし、誰が敢えて反対のことを言うのでしょうか。これらの可愛い子羊たちがいて、誰が敢えて鳴かないのでしょうか。それ故に、その次には争って利益があり、何時も噛み付く準備が出来ている気持ちがまだある、と誰が信じているのでしょうか。

偏見が無く先入観も無く議論されなければならない、と良く言われます。それは今では明白なことですが、何の力も無い提案の一つです。そうではないのです。各人が素直に偏見や先入観を表すことは良いことです。人々がそれらを持って来ないで家に置いた儘でいて欲しいと思うことは、病人がいらないのに病院を造りたいと思うのに似ています。

(一九〇七年十一月二日)

## 七十五 死者信仰 (LE CULTE DES MORTS)

---

死者信仰は美しい風習です。死者の祭礼が正当に位置づけられることは、太陽の光が私たちを照らし出す程に、その信仰がはっきりとした形によって目に見える時です。乾燥した花々、黄色や赤くなった落ち葉の上を歩く人々、長い夜、そして夕べのように怠惰に暮らす日々、それら全てが疲労や食事や眠りや過去を思い出させます。一年の終わりとは一日の終わりでもあり、人生の終わりのようなものです。この時、未来は夜と眠りしか与えず、思考は自然に生み出されたものに帰っていき、歴史学者になるのです。かくして風習の中に調和が生まれますが、その時は私たちの思考が生まれ営まれる時です。それ故、この季節の中で死者の姿を呼び起こし言葉を交わす人間は一人ではなく、沢山いることでしょう。

しかし、如何にして彼らは死者を呼び起こすのでしょうか。如何すればうまくいくのでしょうか。ユリシーズ (1) は死者たちに食べ物を与えました。私たちは花々を持って行きます。供物というものは、私たちの思いをそれらに託するもののためでしかなく、素直に死者との会話を行うためのものでしかありません。人は思い出すことが出来ます。その肉体は不在ですが、死者についての思考であることははっきりしています。そして、私たちの裡に、それらの思考が眠っていることもはっきりしています。それでも花々や冠や花々が咲く墓には、一つの意味があるのです。私たちは考えたいから考えるのではなく、思考するということは私たちが見るもの、聞くもの、触れるものに起因します。或る光景を自分に与えることは十分に理解出来ますが、同時にそれに結びついているかの如く妄想を自分に与えることにもなります。その点で言うなら宗教的儀式には一つの意味があります。しかし、それ等の儀式は方法でしかありません。目的ではありません。ミサを聞きに行ったりロザリオの祈りを唱える人々であっても、死者を訪問する必要などはありません。

死者は死んではいません。私たちが生きている以上、そのことは十分過ぎるほどはっきりしています。死者たちは思考し、話し、行動します。死者たちは忠告したり、望んだり、賛成したり、非難したりすることが出来ます。全てそれは本当です。しかし、その声を聞かねばなりません。全てそれは、私たちの心の裡では生きていることなのです。

この時あなたは、死者たちを忘れることが出来ないと言うことでしょう。しかし、何人もの死者たちについて考えることは無駄なことです。一人の死者について考えることは、何人もの死者たちのことについて考えることと同じです。嘘ではありません。殆ど一人の死者のことしか考えないこと、彼のことを本当に心底から真剣に考えることは極めて普通のことです。私たちは余りに弱い存在であり、私たちの眼は本来的には余りにいい加減です。私たちは、そんなにも自我をはっきりさせた存在ではありません。死者との正しい遠近法を見出すことは容易ではなく、本当の距離を測るのは自分では出来ません。それでは死者が望んでいる正義を絶えず考える審判者の友人になるには、如何すれば良いのでしょうか。私たちが死者たちを理解することとは、反対に彼らの真理に従うことであり、瑣末なことは気にしない信仰心からのものです。忠告するそれ等の力は、多分人間を成長させる最も大きなものであり、それまで存在しなかったものを齎し



ます。何故なら、存在することとは世界中の衝撃に応じることであり、それは一日に一度ならずあることで、一時間に一度以上あることでもあり、その存在が裁かれていたことを忘れることでもあります。従って、そのことは死者たちが何を望んでいるか自問する意味を十分に含んでいます。そして、良く見て、良く聞いて下さい。死者たちは生きることを望んでいます。彼らはあなたの裡に生きることを望んでいます。彼らは、私たちの人生が彼らの望んだことを沢山実現させていくことを望んでいます。かくして墓の中の死者たちの人生は、私たちに戻ってきます。かくして私たちの思考は、今年の冬を越えて来年の春に、若葉が出るまで喜び勇んで跳びはねます。私は昨日、リラの木を見ましたが、葉は今にも落ちるところでした。でも、そこにリラの木の芽が出ているのを見ました。

(一九〇七年十一月八日)

(1) イオニア海のイタケ島の領主であったオデュッセウス（ギリシャ神話）のラテン名。木馬を考案してトロイア戦争でギリシャ軍を勝利に導いた英雄で、ホメロスの『イリアス』では彼の活躍が書かれている。『オデュッセイア』では彼の帰国が書かれている。

スターン(1)が『感傷旅行』の中で語っているのは、或る夜、自分が気に入った人を絶えず何処まで称賛することが出来るのかを試したかったのです。スターンは、たいした人物でもなかった三人をテストしました。彼は先ず、大変耳に快い阿諛を聞かせることから始めました。続いて彼はお返しを要求し、そしてついに彼は三人が無条件に思ってもみなかった程に上品になっているのが分かりました。譬えば外交官が言うようにです。「私は外交についての話をよく聞きましたが、その堅実な外交姿勢や深い見識、あなたが私に語って頂いた人々についての認識を疑ってみることさえありません」。これ等の外交官の賛辞は、物を食べて味わうように自然に外交官たちの身に付いたものでした。スターンは三人に無理強いしようとしたのですが、すればする程一人は大袈裟になりましたし、他の二人はまんざらでもない顔をしているのが分かりました。その代わりに、おべっか使いには思ってもみなかったお世辞と受け取り、軽蔑されそうになりました。でも心の奥深いところでは、隠れ家と同じ安らぎを見出していました。結局、その夜のおべっか使いは三回行われ臆面もないものでしたが、三人は友人になり、親友と変わらない友となり、相手への思いやりを決して忘れず、相手が望んでいる訳でもないのに沢山の親切を尽くしました。私たちに不愉快なひどい話ですが、その話の中にはピリツとした辛辣さをイギリス人が沢山持っているのが解ります。冷たい氷のような冗談をシャワーのように浴びせたり、焼け跡を残したりします。イギリス人のお道化は大きかったり小さかったりしますが、薬味のようなもので、それだけを味わってみても不味いものです。

でも、世界中の人は誰でも賛辞が好きなのは本当で、批判が何時も不快感を与えるのも本当です。称賛するために芸術はある、と良く言われます。それは本当ですが、その言葉は単純すぎて正確ではありません。常に無条件で称賛してご覧なさい。あなたが常に小柄な女性に「あなたは小柄ではありません」と言っても、恐らく彼女は自分が小さいことを良く知っていますから、そう言われると彼女は不快に感じるでしょう。彼女の心がひどく傷付いたのを私たちは良く知っていますし、この驚くべき行為と私たちは似たり寄ったりですが彼女の身長を測ろうとはしませんし、知らぬが仏です。もしも若くて美しく見せる鏡が発明されたなら、世界中の人がそれを見たがるでしょう。でも現実には年老いた自分の姿があるだけです。それは単に表面的なことではなく、正しい認識です。各人は正しく認識することです。

そうは言っても、賛辞を好まない陰鬱な哲学者がいることをあなたは知っています。しかし、彼は何を知っているというのでしょうか。彼は批判も好きではありません。要するに、自分のことについては何も知らない方が好きなのです。彼は自分の身を苦痛にさらすことよりも、喜びなど無しで生きていくことの方が好きなのです。食道楽の人がいるから、節制家になることも出来るのです。

(一九〇七年十一月十五日)

(1) 十八世紀のイギリス擬古典主義の作家であるローレンス・スターンのこと。



私は最近、嘘について書かれた記事を読みました。その中で嘘つきは軽蔑されると同時に不器用でぎこちない、と実力がなくもないその作家が書いておりました。その点は屢々言われてきましたが、その問題は解決されておられません。何故なら、結局のところ嘘も方便や英雄譚の嘘もあり得ますし、過去には色々あったからです。その後で弟子が下した結論は、嘘は自分自身によって悪いものではなく、結果に価値があればその方が良く、その作家が公衆の軽蔑に晒されることは大変良くあることで、大なり小なり不幸なことでもあるとのこと。その記事を読んでから私が自問したのは本当です。嘘の結果が嘘つきや皆のために良いことであるのに、嘘に反対して何を言うことができるのだろうか。

それ以上に本当のことは、嘘は健康に悪いということです。体の自然な機能の一つは、色々な動きによって思考が対応していることです。雄弁家の動作はそれを良く表しています。結局のところ、行うために思考するのが行為の始まりでないとすれば、言葉とは何でしょうか。私が恐れ、逃げて行くものは、言葉です。私が信用し、友情の気持ちに身も心も捧げて、両手を広げて差しのべるのは、言葉です。子供が空腹になって、人々が差し出すものをさっと捕らえるために頭で承諾を齎すのは、言葉です。強い不安の後に、最後に安心して緊張が解けて私がため息をつくのは、殆ど一言にすぎないが、言葉です。話し言葉は、それ自体は肺と舌と唇の動きでしかありません。自然そのものの人間においては、肉体の動きにあらゆる思考が読めるように思います。従って真実を言うことは、呼吸したり消化するのと同じ様に自然なのです。

従って、嘘つきを観察して下さい。彼の嘘は肉体に対する闘いです。筋肉を努力して鍛えても、ぎこちない姿勢や赤くなった顔を見せます。どんなに上手に嘘を付いても、殆ど不可能です。殆ど何時も口ではノン（否）と言っても、体はウィ（肯）と言っています。それ故に誰も嘘をつくことが好きではありません。

少なくとも一つのことに十分気を付けなければなりません。それは何時も静かに良く思考することであり、良く知らないと大変容易に嘘をつくようになります。その時、実際に私が嘘をついている間、私は自分が言っていることを考え、嘘にこだわらずに考えます。以上が、無益な嘘は嘘として殆ど重要でない理由です。しかし、良く知っていることや強く確信をもって思考したことをわざと嘘をつくのは難しく、不可能でさえあります。それ故に修道士たちは一つの大変に重要な慣習という形式を生んでいます。肯定するものを最後には信じると思わないで肯定することは、大変に悲しく辛いことです。

(一九〇七年十一月二八日)

最も早熟で、所謂最も能力がある精神が最高であると私たちは考えます。それは多分、決して大きな間違いではないのですが、それよりももっと重大な結果を齎すことがあります。

良識ある精神は、必ず働きが遅い精神です。そんなことを私が言う時、私の意見に反対したがる沢山の例が示されます。しかし、私が困ることは決してありません。記憶によって受け売りされた知性ほど容易なものは他にはありません。犬が良い例です。その意味で言うのですが、犬たちは正確に数を教えます。8と書かれたボール紙と、7と書かれたボール紙を犬たちに示すと、15と書かれたボール紙を見付けに行つて夢中で犬の飼い主にそれを見せます。

確かにこのような犬たちに似た〈神童〉にはこと欠きません。私が本当に小さかった時、寓話を暗誦しましたが、韻文の一行目はあなたも知っているものです。「ガスコーニュ地方の狐一匹と、他の狐はノルマンディー地方の方言を話しました」云々。私は調子を合わせながら上手に暗誦しました。それで坊やはそれを聞きながら、悪賢さを理解しましたし、三歳半のノルマンディーの狐は物静かであることを知り、議論するにはガスコーニュの狐が二匹いる方が良いことを知りました。しかし、哀れな坊やは既に、そこにおりませんでした。私は彼を確かめようとしてみましたが、その坊やは私でした。危ないところで私は、その狐が野生の犬のようなものであるのを知りました。ガスコーニュ地方の狐の呼び方は、狐の言葉に何もつけ加えるものではありませんでした。そして、韻文の次の部分に関して言うなら、もう一方のノルマンディー地方の方言で言っているのですが、大変に長くて全く不思議な言葉で言っていたのを私は良く覚えており、その意味を決して疑ったりしませんでした。賢い犬が正しいボール紙を持って来るように、不思議なこの言葉を重要だとは思っていませんでした。その犬のように私は偉そうにしましたし、その犬のように全てがもっとはつきりと私に理解出来ました、それは犬が貰う角砂糖があったということでした。

そして、私は体中に角砂糖を持つようになったのですが、それはバカロレア（大学入学資格試験）であつたり、他のものであつたりしましたが、何時も同じやり方で私が自発的に言ったのは僅かなもので、残りはやらなければならない雰囲気でした。そして、ずっと昔から〈もう一方のノルマンディー地方の方言〉に私が戻つて見事に暗誦していたのは、そのことを私が非常に望んだからです。誰も私を決して追い立てませんでした。そして、一度ならず私が自分の方法で限りなく続く苦しみと共に問題を解決させようとしていた間に、人間の顔をした賢い犬が私の耳に囁くのでした。「だから悪あがきしないことだ。もし角砂糖が欲しいのなら、一寸行つてみるよ。ご主人様の処へ持つて行かなければならないボール紙は、そこにあるよ」。

（一九〇七年十一月三十日）

## 七十九 (死を思考すること)

---

私たちは誰もが自分は死なないと考えていたのはやむを得ません。何故なら、私たちにとって死は全く不可解であるからです。私は死ぬことを考える時、私が見たものによって自我という何者かの話を心に描きますし、私に似たものを描くことによって想像します。私は病人であり瀕死で、埋葬されるのを想像します。そうです、勿論十分注意して見るなら、私は自分の葬儀に参列し、葬列に加わってついて行くのが見えて、それ故に何らかのやり方で再び生きている自分自身に気がきます。

私はもっと遠くから見て、この世の中をめちゃくちゃにしています。人間の仕事の中で最新の足跡まで大地から消します。大気が無く、水も無く、既に冷めた太陽の周りを回っているのを想像しますが、私は何時も目撃者で、或る星に住んでいて、何時も思考していて、それ故に何時も生きている自分を想像します。

眠りは死の兄弟であると言われていています。そうです。ですから眠りは死に似ていますし、私は如何なる考えも生むことが出来ません。子供の頃、眠っている時でさえ、その瞬間を理解しようとしたことがありました。そんなことばかりしていると、一度ならず私は目が覚めました。眠っているのを認識するには、目覚めていなければならないのははっきりしています。それ故に私の眠りは実際に、自我の全てではありません。それは少なくとも私が眠っていたことを推測するのは別の証言や、客観的な外部の徴によるものです。

その後で私が良く理解したことは、人間は死後に快適な暮らしが保証されていると屢々考えて来て、墓の周りをさ迷いながら前進する自分の姿を見ずにはいられませんでしたし、人々の影と共にかの有名な小舟に自分を押しつけずにはいられませんでした。この幻想を良く理解した者は、魂が永遠であることを何時も同時に何故証明して来たのかを理解します、従ってその証拠が十分でない時は、何も証明していないことになります。私の死は自己にとって何もなりません。もしも死を考えても、実際には別の人生しか考えられません。かくして免れない幻想の自分をその鏡に見たと思っても、自己を思考する瞬間に、私は自分が生きていると考えます。もしも地下室の中が真っ暗であったならば、ランプに火を点けて見ようとするカーリーノ(1)に私は似ています。

(一九〇七年十二月三日)

(1) 愚か者の役割を演じる軽喜劇に登場する人物のこと。

原因を探求しないで結果ばかり見ることは、一般的には大変に間違っており直ぐに怠け者になります。それに気を付けるためには、自分自身への監視を多くしなければなりません。私は最近大変に優れた作家の作品を読みました、彼の眼は視覚を成しているとか、耳は聴覚のためにあるとか、足は歩行のためにあるとか最早言うべきものではない、と言っています。それは人間という作品の中にあるかの如く、その中で継続して来た目的が何時も眼に見えている、と彼は言っていました。例えば、この道は町へ行くために造られていた、と彼はつけ加えて言いました。

まさしく彼は、他人に注意を促していた罫に嵌まったのです。この例は良くありません。町が出来る前から道はあった、と人々は主張することでしょう。要するに議論は尽きません。良く理解しなければならないことは、町が道筋に沿って形成され、沢山の人々が原因となったその結果でした。道を切り開いた最初の人々は、正確にはそのような場所へ行くつもりはありませんでした。彼らは出来事や事件から逃れていました。洪水とか火事に追い立てられていました。あるいは羊の群に従ってもっと遠くへ行き、牧草地を刈っていました。彼らは小川や大河に沿って行きました。何故なら時折、喉が渴いたからです。夜になれば野営し、雨や風を凌げる場所を探しました。良い場所を見付けるために彼らが気を付けたことは、絶壁の上から石が落ちて来ないか、傾斜地を水が流れて来ないことでした。彼らはそこへ行くつもりだった、と何度でも同じ場所に戻って来るばかりです。従って、自然に出来た道は町へ行くために出来たものではありませんでした。

新しい道に止まりなさい。しかし、新しい道があったかどうか私は自問しました。新しい道というものは古い道に代わるものですし、新しい道が出来るのは何時も原因があります。他の道が泥だらけの泥濘であったり、大変に急な坂道であったり、雪崩や地崩れにやられていたために出来たのです。新しい道は平らにするために高低測量の方法で道具も使って造られたのです。何時も後をついて行く者は、先行する者次第です。土竜（もぐら）は、石があると迂回して自分の穴を作ります。惑星が引力で引きつけられるように、物体が落下するように、土竜は自然に沿った技術者です。

(一九〇七年十二月十三日)

短い言葉で国民性を定義する人々がおります。アメリカ人は企業家、ドイツ人は軍人、イギリス人は植民地化します。理性的人間が如何にして国民の精神的な肖像画を思い切って創り上げるのか、私には分かりません。私はそれを個人について行おうとしませんでした。私が一番良いものを知っていても、テーブルの上でその中身をキャンディー袋を開けるように広げて見せることが出来るのは、一つではありません。或る日勇敢だった人間も、翌日は野兎のように臆病になります。人間は泥棒してはいけないとか、誓いに背いてはいけないとか、地位や出世のために決して卑劣になってはいけないと良く言われます。そのことを言うことが出来るのは、そのことを信じることと同じです。しかし、絶対的に正しいとは認めません。誰でも余りに曖昧な感情を表現することは、科学のようにはいきません。誰が自分自身を底の底まで知っていると言えるのでしょうか。まして自分と同じ位に、隣人を良く知ることも決してありません。知っているどころでなく、何も知らないのと同じです。

個人の本質を言うのも難であったのですから、私が〈国民の心理〉を真面目に理解することを何に期待されているのでしょうか。何処から生じているのか私は良く知っていますので、フランス人は国民に幾つもの分類カードを作っていますが、それはフランス人が公平無私で寛大で正しく人間的である、と言って欲しいまでです。そこにいるのは宴会で礼儀正しい女中たちですが、外国人たちに言わせれば礼儀に適っているのです。いずれにしても、それらの言葉には根拠がありません。

個人である限り国民は恐らく、個人個人の本質に従って行動するのであり、状況にもよります。フランスは権利のために戦いましたが、多分、フランス革命の時代は本当でした。その点については今でも議論されています。この真実はナポレオン皇帝軍がイタリアやスペインやドイツに進軍して野営しても、その後も何年も権利のための戦いだったのででしょうか。物事を大筋で見ると違ふように見えます。そしてその時、もしもドイツの軍隊が力を持っていたならば、権利にとっては少しは良かったでしょうし、それは私たちのためでもありました。しかし、この見方は全体的には真実でも間違いでもありません。ドイツの社会主義者たちは権利やユマニテ（人間性）について全てが私たちフランス人と全く同じであると考えましたし、書きもしました。平和な国というものに居るのは、乱暴者、野心家、けち、高利貸、浪費家、詐欺師、憂鬱症患者、狂人たちです。スコットランドの人がロンドンの住人である限りは違っており、トゥールーズ地方の人とルアン地方の人とも違っている、と私は想像します。そして同じ家族でも、けちや浪費家、内気な人や情熱家がおりませんか。それでも、敢えて家族の精神を定めるのは誰でしょうか。そして、国民の魂を語る人々が事物や人々を見るのに、それ故に如何なる霧を通して見ているのでしょうか。

(一九〇七年十二月十九日)



## 八十二 (子猫の努力)

---

子猫は、今では如何にしてドアが開けられるのか知っています。誰かがドアを開ける前に、先ず一寸したことが行われることに子猫は気付きました。ドアの取っ手に腕が近付いて来て触れました。続いて錠が発する軽い音がして、ドアが開きました。このことによって子猫は、台所のドアを悪戯しに行きました。

子猫は如何にしてドアを開けるのか知りませんでした。少なくとも錠の小さな音を立てることは出来ました。ドアへ飛んで行く度に、この音がしていました。そうして子猫は或る日、我慢出来なくなってドアの取っ手の方へ飛んで行きました。何時もの音がして、ドアが開きました。

それ以来、子猫は再度ドアの取っ手の方へ飛んで行き、殆ど何時も同じ音がして、ドアが開きました。それを見たり聞いたりした人々は、それは何かの前兆だと思いました。

しかし、もっと良いことがありました。田舎にいる子猫は、台所のドアの掛け金を下から上へ跳ね上げていました。その日、子猫は全くの偶然から直接そのことが分かり、人間のようにドアを開けました。しかし、最早我慢したりしませんでした。子猫はドアを開けるのに必要な方法に悩んだりしません。そして鉄のドアの掛け金と同じように、銅の取っ手も跳んで開けます。

このようにして恐らく、人間は色々な機械を知り、梃子というものを知る前は、時折は折れた枝を上手に使って動かしていたのでしょう。それは少なくとも奇跡でしたが、成功しても余り満足しないで色々な方法を選択してやっていました。この選択するということから科学が生まれ、人間は今では猫を支配し、馬やライオンを支配していますが、それはこの小さな考察をやって来たためです。成功は物事の全てとは言えません。何人もの人間が子猫のようにやっておりますが、ドアが開きさえすれば最早長い間探求しないのです。

(一九〇七年十二月二日)

### 八十三 友情 (AMITIÉ)

---

友情には至上の喜びがあります。喜びが人に広がっていくことに気付くならば、難なくこのことが解るでしょう。この喜びの感じが私の体に喜びとなって感受されれば、この私の存在が友に喜びを齎します。本当の喜びであれば、どんなに小さなものでも十分です。このようにして一人ひとりが友に喜びを与えるようになっていき、同時にその宝物となった喜びは自由を生みます。二人は言います。「私は何もしなかったけれども、心の中では幸福だった」。

喜びの源泉はその中にある、と私は認めます。そして、彼らの中に不満があっても最早、何も悲しまなくても良いのです。彼らはお互いに擦り合って、笑わせようとします。でも、一人でいるとするなら、満足している人も直ぐにその満足を忘れて仕舞うと言わねばなりません。喜びというものは直ぐに眠りにつきます。彼は或る種の愚かさに陥り、殆ど麻痺状態です。内部の感情には外部の力が必要です。もし或る暴君がそれ等の外部の力を大事にするように教えるために私を投獄させるならば、私は健康であるために、来る日も来る日も毎日一人だけで笑おうとするでしょう。私の足が健康で丈夫であるためには訓練が必要であるように、私の喜びにも訓練が必要です。

今ここに一束の乾いた枝があります。それ等は、表面上は大地のように動きません。もしあなたがそれ等の枝をそのままに放って置くなら、腐って大地になることでしょう。けれどもそれ等の枝は、太陽から受け取った熱気を隠し持っています。ほんの小さな火を枝に近づけてご覧なさい。するとたちまち、ぱちぱちと勢い良く燃え広がっていきます。ドアを揺らして、囚人を眠りから覚まさなくてはなりません。喜びに目覚めるには、或る種の活気が必要です。小さな子供は、眼が合うと先ず最初に笑いますが、その笑いが笑い以外の何ものでもなく何の理由も持ちません。幸福であるなら子供は笑いません。そうではなくて、むしろ笑うから幸福であると私は言いたいのです。子供は食べることが喜びであるように、笑うことが喜びです。何よりも先ず食べなければなりません。でもそのことは、子供を笑わせるための唯一の真実ではありません。人は自分の考えを認識するためには言葉も必要です。人は孤独であればある程、一人でいることが出来ません。愛することは自分を忘れることであると愚かなモラリストは言いますが、それは余りに単純な見方で正確ではありません。人はもっともっと自分自身から抜け出て別の自分となり、生きているということを自分で実感することも又大切なものです。あなたは穴倉の中で、自分の木の枝を腐らせないで下さい。

(一九〇七年十二月二七日)

礼儀は健康法の一部です。何時も不平を呟いている人間であるアルセスト(1)は、今は胃の病気でないとしても、将来はそうなるのでしょう。心底から行う判断は人間を穏やかにする、と哲学者たちは言います。恐らくそうです。しかし、ずっと一貫した考察は、穏やかさを取り除くことによって始まります。それは恐らく、行為によって観念を失わせる激しい欲望に繋がっていきます。そして全ては複雑で、私たちは直ぐに全てのことを疑うので、現実を引き戻り強情になり、胸を締め付けます。私は例え話をしているのではなく、本当に胸が締め付けられます、というのも冷静で慎重で物ともしない人間の視線は頭の中を読みたがり、実際に現実に生きるのを自ら妨げます。全てが緊張していて、息が切れると自由が無いのと同じです。十分に消化が行われることを望むのならば、言葉や態度や行動の中で多くのことに無頓着にならなければなりません。

フェンシングが下手な人が床に立つと、あらゆる筋肉は強ばって歯を食いしばります。自分自身を磨いて大変上手になっても、非常に疲れて何も出来なくなり、更に攻撃は重くなり不器用になります。フェンシングの老先生は美しいことを私に言いました、「あなたの手が小鳥のようになって欲しいのです」。この教訓は、床の上での行動や心構えにおいて非常に適切です、水兵たちが分別を弁えて大人しく言っているように、仕事によって忍耐強くなった者たちに走らせて置く必要があります、海上ではあはあ息をついても無駄であることを良く知っているのです。

従って疑問を持って、微笑して手を差し出して礼儀として握手するのも悪くありません。彼や他の人々にとっても良いことです。しかし、その弟子はそこに立っている私に叫びます、「いいえ、違います。嘘をついてはいけないし、偽善者であつてもいけません。私はあなた同様に無邪気だった年頃が残念です。でも私に思考することを教える必要はなかったのです」。

もう一度、もう少し沢山考えて下さい、友よ。もっと遠くを見て、もっと良く吟味して下さい。人間には美しいものと醜いものがあり、混じり合っていることを考えて下さい。この人間は自分しか愛さないとあなたは言いましたが、あなたは何を知っているのでしょうか。そして、彼がそのことをあなたに言う時、彼は何を知っているのでしょうか。あなたと同じ様に、彼の中も全てが謎です。あなたの光は何か小さなものを見せてくれますが、謎の儘です。よろしい、もしもあなたが真の懐疑に到達したなら、愛することも頬笑むことも出来ます。雷電を武器にするジュピターを侮辱してはいけません。あなたはジュピターがやることを知りません。ジュピターも知らないのです。

(一九〇八年一月四日)

(1) モリエールの戯曲『人間嫌い』に登場する主人公。

## 八十五 無駄な会話の有用性 (UTILITÉ DES CONVERSATIONS VIDES)

公式のパーティー、訪問、わざとらしい退屈な会話、カフェ、劇場、トランプ遊びについて、多くの悪徳が無駄に与えられることを言うのは容易です。暇な時間を使って規則正しい仕事をすることは、多少なりとも賢明であると理解しなければなりません。

人は何時も働くことが出来ません。そのことは十分知っています。新しい問題に十分間だけでも最も集中した注意力が示されると、直ぐに鈍くなります。ですから賢明であるためには休憩を取らなければなりません。しかし、どうしたら良いのでしょうか。私たちの思考は街路のガス灯のように、鍵を回して消す訳にはいきません。思考を止めたい時は、籠の中のリスのように、まさに思考中であつたり、回転したり、はかどらないでいる時であつたりします。

行為に続く果てしなく無駄な議論を、皆は経験上知っています。全てが行われれば、エンジンを切りたいのですが容易ではありません。動機を言い、反論し、その回答が次々と列を成してやって来て通り過ぎ、又やって来ます。同じ議論が頭で鳴り響き、屢々眠って仕舞います。休む場所無く岩を絶えず持ち上げていくシシュフォスの拷問が思い出されます。その様な想像力を働かせることは健康に悪く、況んやその拷問を宣告された個人はもっと豊かで教養ある精神を持っています。

それ故に本当の休息を取らなければなりませんし、労働したら眠らなければなりません。そして、面白くない天気の話や多くの政治家の公式見解は、余儀なくそれらに従って行きさえすれば、想像力を少しずつ眠らせるのには極めて打って付けです。そして、それは私たちがそれらの儀式を演じる役があるや否や、儀礼や野心を追うことです。もしも不作法でいい加減でないのを望むなら、注意して聞いて物わかりが良くなければなりません。それは難しいことでも疲れることでもありません。たっぷりと時間を使い、次から次へ瞑想することを予防し守ってくれます。それ故に眠るためには、小さい時にやったように橙花油を嗅ぐよりも、あなたは寧ろ一寸の間ですが一時間ぐらいは駆け引きが巧みな外交官になることです。

(一九〇八年一月八日)

## 八十六 フィラントと明かり (PHILINTE ET LA LUMIÈRE)

フィラントは仕事部屋へ這入って、電気のスイッチを回して部屋を明るくします。続いて本棚から本を選んでテーブルの前に座ります。そうかと思うとクリスタル・ガラスできらきら光る天井から照らす大変鮮やかな光を消して、それと同時に緑色の傘でぼんやりと光るランプの火を点けます。こうして魔術師としての腕を試す前に彼は私に言いました。「私は現代が好きだ。現代の産業が好きだ。全てが綺麗で単純だ。ご覧なさい。私の古いカルセルランプは今、屋根裏部屋にある。最早、軋む音やぜいぜいという音は聞こえない。カルセルランプにつきっきりにならないでよくなると、鼻先で臭っていた不愉快な煙ともおさらばだ。こうして室内での仕事はより早く片付くようになり、私は本を読み、今まで以上に落ち着いて考えられる。今の明かりは移動させなくても何処でも明るくしてくれる。素直でやるのが迅速で無口な奴隷が私にいるようなもので、私にも構うことがなく、この奴隷は堪え忍ぶことがなく食べることも眠ることも必要ない。進歩の結果、私はより幸福になり、不愉快なことも少なくなっている。私は主人だが、決して奴隷を持っていない。最近生活が快適である」。

私は彼に言いました、「フィラントよ、あなたがいるここは劇場のようなものです。舞台装置より向こうへ行きません。舞台の下で働く道具方の人々のことは知りたくないのです。この私は彼らのことを考えざるを得ません。彼ら自身がいるその処から電線は来ていませんでした。私は最近、火花を出した事故で指を二本失った電気技師のことを知りました。何人もの人々が全ての配線を行うために働いておりましたし、それらを点検して修理するために毎日働いておりました。それらの線の端まで見に行ってください。蒸気機関の機械が力強く働いているのが分かりますが、それは五百メートルの豎坑から採掘されてやっとの思い出でここまで運ばれて来た石炭を使っております。ハンドルや巻棒が回っている部屋の中には何人もの人が一晩中働いていて、或る人は恐ろしい火に照らされ、他の人は火花やベルトや歯車装置によって四六時中危険な目に遇っています。明日の夜明けには凡そ百人位の人が、そこで運転されているような機械を作るために煙や埃にまみれていることでしょう。フィラントよ、電灯が点いている時は眼に見えないが多くの人々があなたを支えているのです。彼らは犬のように、いや犬よりも優れてあなたの行動を助けているのです。只、神経質といえる技師長はあなたと彼らの間に壁を幾つも設けました。あなたはもうそれらを見ませんし、聞きもせず、その存在も忘れます。そして、それはあなたが満足感を抱くためにはかかせないことです。というのも私はあなたと知り合いで、あなたの心が優しいからです。もしもあなたの家庭はランプで申し分ないのでしたら、あなたは十分前に次のように言うのでしよう、「遅くまで働くバプティスト派の人よ、眠りに行きなさい」。

(一九〇八年一月九日)

## 八十七 赤い略章 (RUBAN ROUGE)

十字架を想像するや否や馬鹿にすること、十字架を持っていないと分かるや否やつまらない言い訳をつくことは、余りに滑稽です。私は心理を分析する若い商人を気の毒に思います。レジョン・ドヌール勲章は宗教的制度です。祈りや儀式を課せます。それを拒否することも出来ずし、その理由を言わないことも出来ます。しかし、それを馬鹿にして祈ること、そして聖人という聖人を馬鹿にした仕草をすることは弱い人間です。

もしも私が勲章を授けられる年齢になって、人々がお祝いに来てくれたならば、何故なら何でも起こり得るからですが、私は次のように言います。「名誉とは大変重い言葉で、大変偉大なものです。私は公共のために血を流して来ませんでした。それ故にあなた方は、私が本当に弱くて汚点だらけであるのに、純粹に内なる英雄主義や貴重な善を見たがっているのだと私は思います。私には良心の恐れがあることを敢えて言います。私の人生はそういうものであり、そのことをあなた方が知らないことも私は知っていますし、私の人生は完璧ではありませんでした。一度ならず私は感情の勢いから花咲く小径に足を踏み入れ、暗黒の絶望の淵まで行きましたが、そこへ落ちませんでした。本当です。しかし私が保管していたこの中庸の徳の計算書を作るのは誰でしょうか。私の美德に混淆していた恐怖の量や怠惰の量を切り離して量るのは如何なる化学者なのでしょうか。

私の記録に従って決定するのは高貴な審判者たちであるとあなたは言います。しかし、それは信頼出来ません。もしも私がその重さを判定したいと思ったなら、私の打ち明け話を彼らに話して、或る種の一般的な罪の懺悔をしなければなりません。しかし、大変高潔な人間によって与えられた罪の許しは、私にとっては有難いものにならないことを告白します。不幸なことにあなたが言う審判者たちは、大変に高潔とは見做せません。彼らを傷付けないで言うとするれば、彼らもあなたや私と同じ様な人間であり、喜べない思い出なら幾らでも自分の人生にあるということです。もし良心の指導者や名誉の審判者を探したならば、私は告白しますが、彼らは私が考えていた人々ではありません。

私は呆れる程物事を大きくしている、とあなたは言います。問題としている名誉は大変に物静かで善良で些細な美德であり、何時も定刻どおりやって来ることもなく、国家業務に疲れることも傷付けられることもない役人どもでも毎日受勲している、とあなたは言います。よろしい。しかし、そうは言っても私は、レジョン・ドヌールの赤い略章を持っていないフランス人が何故そんなに沢山いるのだろうと自問します。というのも中庸の徳を持っている人々は、取分け大きな悪徳とは無縁であり、それを私は自分の周りの至る処で見ているからです。中庸の徳は舗装された道に生えるようなもので、郵便配達人や門衛や市内電車の運転手は、私にとって非常に大切な人々です。実際に勲章も無く知り合う多くの人々には、この中庸の徳が無いと思わせて置くのには我慢がなりませんし、その中庸の徳であなたが私のボタンホールにそのバッジを付けたがります。でもそこには嘘があり、私は決して共犯者にはなりません」。

その時、賢者が私に言います、「何故そんな話をするのですか。習慣は重要です、それ故に習

慣を理解しなさい。ミサへ行く人々のように振る舞いなさい。あなたは、パンと葡萄酒からキリストの肉と血に変わったという実体変化の緻密さを彼らが考えていると思いますか」。その通りです。しかし正確に言うなら、私はミサへ行きません。

(一九〇八年一月十四日)

## 八十八 閉じられた家 (MAISON CLOSE)

チェスのゲームは決して変わりませんでした。一般的な家屋も変わりませんでした。そのことは進歩が全てではないことを良く分かせています。私たちは電気で動く列車を運行していますし、利己主義にも愛他主義にも磨きをかけています。しかしながら、モー(1)やどんな町にもある城壁で出来た通りには、門が閉じられた一軒家があります。この家にはポリネシアの人間と左程違わない未開の残酷な人々がおります。私は現代の人々の話や道徳論とは程遠いことを言っているのですが、そのことを信じたくなくても恐らく彼らは、現代の私たちにより近い人間であることを意味しています。

そこで生きているのは、動物のように仕事をしている奴隷たちです。そこでは着飾った女たちがお金のためにサービスし、他の者は骨付きあばら肉をサービスすることもあります。これらの奴隷たちや奴隷商人たちは、地下の囚人たちのように何時も自由や愛や家族や名誉のことを考えて、まるで地獄に落ちた人々が天国のことを考えるようなものである、と純真な魂を持ったあなた方は思うかもしれません。でも全然違います。彼らも人間の生活に変わりありません。調子が良い時もあれば、笑うことも泣くことも喧嘩をすることも仲良くなることもあります。力によって管理する主人と、説得して管理する主人がおります。彼らの裡には狂気と英知があります。道理に叶った格言があります。名誉の規範があります。侮辱があります。無礼があります。崇高な情熱と下劣な情熱があります。一方ではけちなために軽蔑され、他方では嫉み深い嘘つきとして知られています。別の人は大変に優しく、心からの本当の涙を流した後に、愛に死にます。

しかし他方では、日々の仕事が情熱を眠らせています。暇な時はお喋りをして過ごします。人生は修道院の中にいるようなものです。院長は恐れられますが、心の中では少しは愛されていて、クリームケーキの周りでガラス器を持ち上げながら祝祭を行います。その時、人々は一度に忘れます。仕事とは秩序あるものですが、情熱は無秩序のものであり、話という話が似たようなもので我を忘れます。

そのことを聞いた部外者は、これらの哀れな遊び人の商人たちに恐らく、叫んで次のように言います、「ですからあなたがやっている仕事のことを考えなさい。あなたを道具や食糧のように売り飛ばす野蛮人のような人のことを考えなさい。そういうことを全て判断しなさい。そういうことを全て断ち切りなさい。そして次にガラス器を高く上げない」。その部外者は笑わせます。習慣に対して理性を持ち出すために、何時も少しばかり滑稽です。不意を喰らって驚いた人間を私たちは笑いますし、私たちの礼儀正しさ、正義、表向きの話、美德、そして〈理性〉という秤において、喜びと苦しみの重さを量りたいと思っています。

(一九〇八年一月十六日)

(1) パリの東方約三十キロに位置し、マルヌ川右岸にある郡庁所在地である。



## 八十九 王は退屈する (LE ROI S'ENNUIE)

大したことにならない病気にかかったり、単調そのものの道を歩んでいかないことは生きるためには良いことです。王たちが、もしも欲しいものが全て手に入るとするなら、私は彼らを気の毒に思います。何処かに神がいるとするなら、神でも少しばかりノイローゼ状態になるに違いありません。その昔、神は旅行者の姿をして家々のドアをノックしに来たと言われていますが、恐らく空腹や喉の渇きや愛することの情熱を体験することは、幸福を見出すことになるでしょう。少なくとも神が自分に出来ることを少し考えてみるなら、神が思うことは全て戯れでしかなく、それを望むならば時間と空間を超えて自分の欲望を殺すことも出来ます。要するに、神は退屈していました。神は、その時から自ら何かに夢中になるか溺れるしかなく、あるいは眠れる森の美女のように良く眠るしかありませんでした。幸福は、多分何時も何か不安とか情熱とか、私たち自身を目覚めさせる少しの苦痛というものを前提にしているものです。

実際の本物の幸福よりも、想像力によってもっと多くの幸福感を感じることは良くあることです。それが生じるのは、実際の幸福を人が手に入るとこれで全てだと信じて、走る代わりに座り込んで仕舞うからです。二人の金持ちがいます。一人は退屈して座っているだけの人です。もう一人は楽しそうで、彼は何度も計画を立てては仕事をしますが、それはまるで欲しくて欲しくて堪らない土地を手に入れた百姓のようであり、最後には主人になることでしょう。何故なら、人を喜ばせることが権力であり、それは人を休息させることではなくて、行動させる力であるからです。何も行わない人は、何も愛しません。出来合いの幸福を彼の処へ持って来てご覧下さい。彼は病人のように顔を背けます。それに音楽を聴くことよりも創ることの方が好きでない人がいるとすれば誰でしょうか。困難は人を喜ばせるものです。それ故、道に障害がある度ごとに、血を滾らせ炎を活気付かせます。もし苦勞することなくやり遂げてしまったならば、誰がオリンピックの勝利者としての冠を欲しがるとでしょうか。誰も欲しがるとは無いでしょう。絶対に損をしないで、リスクを伴わないトランプで誰が遊びたいと思うでしょうか。宮廷人たちと遊ぶ老王がいるとします。老王は負けると怒り出します。そして、宮廷人たちはそのことを良く弁えており、遊び方を知ってからというもの、老王は決して負けませんでした。お分かり頂けたと思いますが、老王はトランプを二度と手にしませんでした。彼は立ち上がり、馬に乗り、狩りに出掛けますが、それも王としての狩りでしたので、獲物は王の足元にやって来ます。鹿も飼育されているものでした。

私は、何人もの王を知りました。彼らは、小さな王国の小さな王でした。家族の中で王は愛され、ちやほやされ、大事にされ、上げ膳据え膳でした。王たちには、やりたいことをやる時間がありませんでした。王を見守る注意深い眼が、何を王が考えているのかを読み取っていました。そうです、この小さなジュピターたちは、それでも雷を落としたりしました。彼らは障害を自分で作り出しました。彼らは気まぐれな欲望を自分で作り、一月の太陽のように移り変わり、あらゆる欲望の代償を狙いますが、軌道を逸して退屈に陥っていました。退屈によって神が死んでいないのなら、平坦な王国をあなたに支配させないでしょう。神は山岳の道へあなたを導き、道

連れとしてアンダルシア地方の優秀な牝の驢馬をあなたに与えるでしょう。その驢馬の両眼は井戸のように潤み、鉄床のようにしっかりとした額をしていて、そして突然に立ち止まりますが、それは路上に自分の耳の影を見ても不審に思うからです。優秀でもやることは愚かです。

(一九〇八年一月二二日)

子供や未開人たちは屢々、無生物の物である石や家具や道具に一種の人間の意志や個性を与えて発育し成長するという大変有名な本を私は昨日読みましたが、二十回目でした。その物は時々、相手を叩いたりしますが、多くは罵詈雑言であるのが分かります。そのようなものが宗教という人間内部の姿になっているようです。

私はうとうとして読みました。何故なら、そんなことは今まで良く言われて来たことでしたからで、その時は私にも疑問が生じて来ていたからです。私は先ず自問します。何が私を苛々させて叩くこともあるのか、理解しましょう。確かなことは分かりません。しかし、多くはもっと単純です。

皆がやるように、急いでいる時に私には椅子やその種の物を勢いよく動かす習慣があります。しかし、それらの物が一つでも私に激しくぶつかったならば、その時は自然な反動として馬が拍車から刺激を受けて動き出すように、私はそれをもっと速く大きく移動させて、或る証人が心掛の悪い者に罰を与えているのである、とよく信じて仕舞うことがあります。

そして結局のところ、習慣の結果から私が移動させられない対象に激しくぶつかる時、腹立たし気にそれを移動させる態度に出ます。手とか足で非常に乱暴に叩くことになります。私が嫌悪しているこの悲劇的小景で結末を付けた者は、完全に間違っているのです。

私が子供だった時、屢々テーブルや本や椅子を人格化したり、半ズボンのボタンを兵隊にして何時間も動かしたりしては独り言を言っていました。しかし、それは遊びでしかありませんでした。私は、これらの事物に魂があったとは決して信じませんでした。私は何人もの人に質問しました。そして大部分の人は、私が自分自身に答えていたのと殆ど同じ答えを私に言いました。

その時から質問は、事物に人間の意志や人格を付与する者たちが、何時もそれを遊びでやっていないかどうかを知ることになりました。しかし、歴史家の本心はそんなにも長くそのことを考えません。彼は詩的に記入することを覚え、文字通りに受け取ります。例えば私に書いて寄こすのであれば「我が親愛なる古きペン軸」です。千年後に歴史家はこのテキストを発見して、アランは物神崇拜者であり、自分のペン軸が或る種の神と通じていると信じていた、と言うのでしよう。

(一九〇八年一月二六日)

一ノルマンディー人のプロポ II  
【2013年5月号】

<http://p.booklog.jp/book/70022>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70022>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70022>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ